

# 悪魔を生成する認識の誤謬

——野坂昭如「子供は神の子」論——

徳 永 淳

## 要 旨

昭和四十二（一九六七）年に発表された野坂昭如「子供は神の子」は、その表題を反転させた内容の小説である。妹の葬斂で大人たちからの賞讃を享受した小学校二年生の冽は、その晴れがましさを再度味わいたがために「祖母」を死に至らしめる。しかし、大人たちは冽が「祖母」を死に至らしめたことなど知る由もなく、再び彼を優遇する。

本作は、子供を純粹無垢な存在として扱う大人たちを批判していると捉えられてきた。しかし、その批判もまた大人たちを主眼に置き、冽の内面に焦点をあてていない。

本稿では、大人たちの誤認を指摘した上で、冽の内面も分析し、「子供は神の子」を捉え直していこうと思う。

## キーワード

「祖母」の躰・「パパ」の誤認・「ママ」の裏切り・「称揚」・「大人の賞讃」

## 一 はじめに

「子供は神の子」は昭和四十二（一九六七）年、九月に『小説現代』に発表された短編小説である。その後、本作は同年十月に新潮社刊行の『受胎旅行』に収録された<sup>(1)</sup>。

物語は、小学校二年生の冽が一月半前に亡くなった妹久恵に対して追善することから始まる。その後、久恵を亡くした経緯と葬儀の模様が語られる。妹を亡くした冽に、周囲

の大人は思い遣りの言葉を投げ、彼の葬式での行儀を褒める。久恵の四十九日を目前に迎えたとき、例は一連の葬儀が終わろうとしていることに悲しみを感じる。

例が悲しみを感じてる中、彼は遊びで「祖母」と角力を取る。例は「パパ」に教わった技を「祖母」にかけ、彼女を転倒させる。転倒したことで、「祖母」は持病である心臓発作に見舞われる。水屋にある葉を求める「祖母」に対して例はその背中に乗ってとびはね、彼女を死に至らしめる。

師走にかかるということで「祖母」の葬儀は、初七日のみで終わる。年が明けて三月、三味線の稽古の為、実家に通っている「ママ」が酒好きのばあさんの相手をして、泥酔した状態で寝入っているのを例は発見する。例はガスストープのガスを漏らしたままにして自分の部屋に戻る。例は「ママ」の葬儀を夢想しつつ、また「一人ぼっちになっちゃう」恐怖に苛まれる。まだ「パパ」が残っていることに例が希望を持つ中で作品は結ばれる。

## 二 「子供は神の子」の先行論

『野坂昭如コレクション1』の「解題」で大月隆寛氏は、本作を「火垂るの墓」の定説である妹への贖罪ではなく、

「妹殺し」のモチーフを「ナマのままごろりと放り出し、不気味さを強調した作品としている。その上で、戦災で浮浪児として生きねばならなかった作者が「子供は純朴なもの、無垢な心を持った存在である、というイデオロギー」を批判してきた作品であると、大月氏は述べている(2)。

また、西本鶏介氏は「行為の恐ろしさに気づかなくとも、みずからの願望を実現させる知恵を持つ」「子どもを」「天使や」「神の子と見ること、その本質をみくびっている大人たち」を批判しつつ、例を「悪魔に魅入られた」「恐るべき子ども」としている。その上で、西本氏は例という「悪魔に魅入られた」子供を生み出した原因である大人の社会を通して、「権力のいうままに地獄を生きのびてきた焼跡やみ市派のふやけきった今日の世相への挑戦状」として本作を捉えている(3)。

両氏に共通しているのは、無根拠に子供を天使や神の子として捉えることへの批判である。その批判は、正鵠を射ていると考える。しかしながら、大月氏の論は部屋に「長島と王の写真」を壁に飾った「小学二年の」児童である例と空襲によって浮浪児として生き延びた十五歳当時における作者の内面を同一視している。時代も社会状況も異なる例と作者の内面を並べて述べている大月氏の論は、強引で

あると言わざるを得ない。

一方で、西本氏の「焼跡やみ市派」による「今日の世相への挑戦状」であるという論は、冽と作者を峻別して述べられている。しかし、西本氏は冽を「祖母」と「ママ」を殺害する人間に仕立てた原因を「悲しい出来事」である葬斂で「頭をなげ、王様にしてくれる」大人たちへのみ求めている。その一方で、冽を「大人のごとく葛藤することがない」子どもとして一括りにし、彼の「悪魔そのものになりきれ」内面を西本氏は、不問に付している。

本稿では、大月氏と西本氏に共通して見られる〈作者〉を括弧で括り、テキストを中心に考察する。そして、「悪魔に魅入られた」子供を生み出した大人の行爲と冽が悪魔になってしまふに至るその内面を〈語り手〉に注視しつつ探り、「子供は神の子」の主題を再検討していく。

### 三 冽の孤独とその生成

#### (一) 冽の性格と彼が施された「祖母」の躰

〈語り手〉は、冽を

背丈け人並みにあったが、きわめて気が弱く、それは祖母に育てられたせいかも知れぬが、自分より体もちい

さく、年も下の子供に泣かされ、そのくせ陰にまわると、その大事にしている玩具を盗み、しかも、それに赤インクを塗って別物に仕立て、その前でみせびらかしたりする

人間であると述べる。この後、「そこへふつて湧いたような久恵の誕生」と語られる。久恵が「まだ十カ月の乳児」であることから、冽は小学一年生の頃にして、臆病で盗癖を持つ少年だったことになる。久恵が逝去する日の冽と「祖母」の「百円札二枚」をめぐる遣り取りから、彼の盗癖は治っていないことが分かる。

冽の性格を考える上で重要となるのは、「百円札二枚」の窃盗に至った経緯である。それは、冽が「裏の四年生のボールを昨日なくし、弁償しろといわれていた」ことが原因である。このことを、冽は「祖母」に相談しなければ、告げもしない。「祖母」に相談すれば、どのように解決するかよりも他人のボールを紛失したことを、叱責されると冽は、分かっているのだ。

それは、冽が「久恵の飲みのこした哺乳ビンをみつけ、」「ほんとにいい汚いね、あたしやそんな風にお前を育てた覚えはありませんよ」と「祖母」に頭ごなしの叱責を受けた過去にまつわる。冽は「久恵の飲みのこしをみつけ、」

「なつかしい味をむさば」る。「さらにほしくなつて台所の粉ミルクのカンに狙いをつけたところを」祖母に見つかり、冽は叱責される。そのとき、祖母は冽が「粉ミルク」を欲する理由などを考えることもなく、彼を貪汚な人間であると認識して、一方的に叱責する。

また、お菓子目当てで久恵のベッド周囲を調べて、はずみで泣かせてしまった際にも「こんなところを祖母にみつかったら、また（傍線は論者による。以下同じ）怒鳴られる」と思って、冽は対策を講じるのである。「天井からさがったガラガラをまわして」いる中で久恵が泣いているという状況は、冽が泣いている彼女をあやしているとも取れる。しかし、〈語り手〉は「祖母」がその様子をあやしているとは捉えない人間であることをこの箇所ですべている。

すなわち、「祖母」は自己の規範とする人間像をあてはめるようにして冽を育て、そこから逸脱することを許さなかったのだ。そのような「祖母」の躰を〈語り手〉は見通しており、冽の「きわめて気が弱い性格の原因を」「祖母に育てられたせい」であると述べるのである。

更に〈語り手〉は

「ほんとにいい汚いね、あたしやそんな風にお前を育

てた覚えはありませんよ」そのくせ、祖母だって、ひそかに粉ミルクをなめていて、年ではけたか唇のまわりに粉をいっぱいつけた顔で、甘露の法雨を読経していたりするのだ。

と述べ、「祖母」の失態を明るみにし、我田引水たる彼女の人格を指摘する。そして、同時に大人や子供関係なく人間が普遍的に備えている自己中心性を〈語り手〉は、この箇所ですべて提示する。

このような、人には厳しく自分に甘い「祖母」の抑圧的な躰が冽を「きわめて気が弱い人間にしたのだと〈語り手〉は、推測するのである。

## （二）冽に齎された称揚

冽は、自分を泣かした「年も下の子供」の「大事にしている玩具を盗」む。「年も下の子供」の「大事にしている玩具」が欲しかったから、冽はそれを盗んだのではない。冽の行為の目的は「それに赤インクを塗って別物に仕立て、その前でみせびらか」し、「年も下の子供」に復讐することである。自分に危害を加える存在に対して、冽は自分の思い通りなるものを見つけ出し、それを恣にすること

で気持ちを鎮めるのである。

そんな冽を脅かすのは、久恵である。「もの心ついてからずっとなれ親しんでいた」部屋を冽は、「陽当りがいいからと久恵にうばわれ」る。

かつて冽の本棚の置かれていたところに、赤青黄白と四段に塗りわけられたベビー筆筒、長島と王の写真のあった壁には、天使の絵、そしてまだ歩けもしないのに、冽のより大きな玩具箱があり、窓のカーテンもあたらしくピンクと白の二重。

これは、冽の部屋が「パパ」と「ママ」と「祖母」によって久恵の色に塗り替えられていく箇所である。〈語り手〉は冽に寄り添って恰も、彼と彼の部屋が久恵によって蹂躪されたように語る。そして、傍線部に見られるように久恵の待遇が冽より良いと〈語り手〉は述べている。冽にとって彼の部屋は、自分の思い通りになる空間だった。しかし、冽の部屋は、カーテンの色まで跡形もなく塗り替えられる。そして、「二階の父の書斎に同居」させられた冽は、自分の自由にできる空間を剥奪されるのである。

更に、「パパも祖母も、まず久恵で、「このこは、こりゃ将来美人になるぞ」など、パパが酔ったあげくに久恵を抱

きあげたりする」のである。「パパ」のこの行為を受けて冽は、「自分は美人ではないのかと鏡に見入り、ひそかにママの紅などもつけ」るのである。自分だけの子供として扱っていた「祖母」や「パパ」も久恵によって、冽だけの存在ではなくなる。

冽に僥倖をもたらしたのは、久恵の葬斂である。「鬼のような表情の時もあり、「きげんがわるけりや」、「意地悪をしかけた」「祖母」は、冽を「ふところに抱」き、優しくしてくれる。「パパ」も冽を「膝の中に置」き、「特別扱い」してくれる。「いつもなら絶対にダメなのに、黒い着物のままママが布団にそい寝してくれ」る。「伯父や伯母もなにかという」と「頭をなで、「かわいそうに、さびしくなるわね」と、めったやたらかわいがってくれる」のだ。「ただひたすらパパの横にすわり、頭を垂れ」ているだけでも冽は模範として扱われるのである。

他者から齎される「特別扱い」のみならず、冽は自己の能動的な行為すらも評価されるのである。それは、賽の河原の文句を「大きな声をひびかせ」て唄い、伯母さんに褒められたことと、焼香の際、「久恵ちゃんさよなら、天国へ行くんだよ」とさげび、「子供は神の子ですなあ」という大人の評価を得たことである。この伯母さんや大人の賞讃は、冽を称揚するものである。

更に、久恵の告別式の為に学校を休むことについて

授業のはじまっている教室にノコノコ入っていった、

「先生、妹の久恵が死にましたので、お休みさせてください」きつと先生も、日頃に似合わず、冽の頭をなで、「それはお気の毒でしたね、いいですよ」冽はクラス中の視線を浴びながら教室を出る。(中略)

病気どころではない、妹の死、妹の死、かわいそうな妹、餓鬼大将も当分は冽を特別な眼でみるにちがいない。冽の好きな女の子は、遠くから友だちとささやきつつ、冽にあこがれのまなざしを送るに相違ない。

という冽の想像も「思った通りの反応」を得るのである。この冽の想像で重要なのは、彼の願望が他者から認知されたいということに止まっているということである。教師とは欠席する為の遣り取りがあるので別としても、冽は同級生から慰労の言葉ではなく、「特別な眼」や「あこがれのまなざし」を欲している。すなわち、冽は他者からの憧憬を得ることを優先にしているのである。

久恵の葬儀は、冽にとって称揚の連続であった。冽に齎された数々の称揚は、他者から認識されているということ、を彼に自覚させた。そして、この冽に対するかつてない称

揚こそが、後に続く「祖母」の殺害と「ママ」殺害の起因となる。

#### 四 「悪魔に魅入られた」子供

##### (一) 冽に内在する悪魔の素地

「ママが、時々、久恵のベッドの周囲に」置いたままにしている「ビスケットやあめ」にありつこうとして冽は、久恵のベッド周囲を探索する。そのはずみで久恵が泣いてしまい、冽はそれを隠蔽しようとする。それは、

泣き声を押えるつもりでうすい布団を久恵の顔にかぶせ、すると思いがけない力ではねのけようとしたから、つい冽も強く押しつけて、(中略)

ふと気づくと久恵はしずかになっただけで、布団を元にもどすと、両方の鼻の穴から膿のような鼻汁を出し、両手を肩のところへあてばんやりと、まだカラカラとゆるやかにまわりつづけるガラガラをみている。

というものであった。その後、冽は「公園へ」「あそびに行き、帰宅すると」「久恵は顔に白い布をかけられてひっそりと、布団にい」たのである。久恵の亡くなった日、冽が学

校から帰宅したのは、「昼過ぎ」である。久恵を泣かせてしまったことを隠蔽しようとした一連の行為があつて、冽は「あそびに行」つた。医者の死亡確認時刻は「午後一時四十分」である。すなわち、久恵が息を引取つたのは「午後一時四十分」より前である。また、久恵には特別な外傷もなく、家にお祈りを終えた「祖母」が在宅しており、外部から侵入した者の犯行とも考えられない。したがつて、久恵の死を齎したのは冽と考えるのが妥当であらう。冽に殺害意思がないことから、久恵の死の原因は、彼の隠蔽行為ということになる。しかし、問題なのは久恵を死に至らしめた原因を冽が省みないことである。

〈語り手〉は

実は冽、おんぶして児童公園にあそぶ時は、公衆便所の後ろに久恵をおろして、まるでゴキブリの手をもぎ脚をちぎることく、その臍のまだかたまらぬのをつつき引っぱり、耳に鼻をつつこんだり、思いきつて息を吹きこんだり、生きた人形扱いであつた。

と述べ、さらに「留守を、久恵といふ時、久恵がおしめを汚せば、その黄色いものを指で口に押しこみ、冽にとって、久恵だけが、まったく自分の意のままに従う奴隷だつ

た。」という冽の苛虐行為を告白する。しかし、久恵の納棺の際に、彼女の皮膚の色の变化などを以て、冽は「あれは嘘の久恵ちゃんだ、写真の久恵ちゃんが本当の久恵ちゃんなんだ」と思い、「布団を押しつけた時、もがき苦しんではねのけようとした、その感触も、咳きこんでいた呼吸も、まるで夢のように」感じることで、自己の殺害行為から目を背ける。

一方、冽の数々の苛虐行為を受けている久恵を〈語り手〉は「人形扱い」や「奴隷」と語る。すなわち、冽の久恵に対する様々な行為を〈語り手〉は俯瞰して語り、彼の行為がいかに残酷だったかを示すのだ。そして、同時に冽に内在する悪魔の素地を〈語り手〉は読者に提出しているのである。

## (二) 冽を悪魔にする大人の行為

冽が自己の充足の為に人をも死に至らしめるという悪魔の素地があつたにせよ、彼を悪魔に変容させたのは、大人たちの彼に対する行為の数々である。冽が悪魔に変容していく土台が築かれたのは、久恵が亡くなったときの「祖母」と「ママ」の諍いと、それを制した「パパ」の一連の出来事から窺われる。



「それより冽がかawaiiそうだ。かわいがっていた妹に死なれて、へんなショックをうけるといけない」女達のですり泣きがつづき、ふと気づくとパパがそばにいて、「久恵、天国にいけよ、天国へいくんだよ」久恵の髪をなでさすり、「冽ちゃん、久恵はね、神さまに召されて天国へいったんだよ、泣かないね」泣かないねといわれて、急に、それまでなんでもなかったのが悲しくなり、視界がくもったとたんに、冽は自分でもわけわからずせき上げてパパの膝に泣きふし

「祖母」と「ママ」の諍いを制止し、「パパ」は久恵が天国へいくことを望む。「パパ」の願望は、直後に「天国へいった」という決定事項になっている。そして、「天国へいった」のだから「泣かないね」という「パパ」の言葉を受けて、冽は「悲しくな」って「パパの膝に泣きふ」す。

「年中久恵をかまい、すすんでおんぶもすれば、二人っきりの留守番もいやがらなかったから」大人たちは、冽が妹を大切にしていると「誰一人」「うたがわな」い。しかし、冽は久恵の亡骸を前にして「なんでもなかったの」である。それは、冽にとって「かわいがっていた妹」を喪ったという認識がなかったからだ。〈語り手〉は冽が「悲しくな」つ

た理由を、久恵が「神さまに召されて天国へいった」からではなく、「パパ」に「泣かないねといわれ」たからであると語る。

「パパ」は、久恵が「天国へいった」のだから、喜ばしいことであって泣くことではないと冽に訴えている。しかし、冽は「パパ」の「泣かないね」という言葉に反応している。冽の「泣きふし」た行為を「パパ」は、彼が「かわいがっていた妹に死なれ」たからだと誤認する。「パパ」は、久恵の死因も「風邪ひいているところへ腸炎を併発した」からであると捉えている。更に「子供には死ぬこととか、その怖れなんてわからない」として「パパ」は、冽に優しく接する。「パパ」のみならず、「親戚の伯父伯母」、周囲の大人たちは冽が「かわいがっていた妹」を喪ったと認識しており、それに伴って彼を慰撫する。そして、「パパ」の誤認は、冽を悪魔にしていくなか端となったのである。

冽は葬儀屋の手伝いを唯一許され、「伯父や伯母もなにか」というと冽の頭をなで、「めつたらやたらかわいが」る。ロウソクをくすねても「祖母」も冽に何も言わない。「ざわつく子供達」の母親は冽の行儀を褒め、我が子の規範として扱う。日頃禁止されている夜更かしも許され、「ママ」も添い寝してくれる。

冽が自発的に賽の河原の文句を唄えば「賞め」られ、「石



でふたに釘をうつ時、腹いせのように力いっぱいたたいても賞められる。

学校を休むときの妄想も実現し、冽の行為は全て賞讃され、「晴れがましさはつのるばかり」である。

以上のような久恵の葬斂で冽に対する大人の賞讃が彼を肯定する。そして、冽の内面を全く観じない大人の賞讃は、彼を悪魔にしてしまうのである。

### (三)「祖母」の殺害

久恵の葬斂で賞讃を得た冽は、「祖母」の「まあ、今日一日でおしまいだから」という言葉でこれまでの充足が得られなくなることを知ってしまう。

久恵の四十九日の翌日、仏壇の前で佇んでいた冽は、「祖母」と角力を取ることになる。「今年の夏」に「パパ」に教えてもらった「渡し込み」で冽は「祖母」を転倒させる。「しきい」の後頭部をぶつけた「祖母」は、冽に「着物の襟を」つかまれ、「喉を押」されたことで持病である「心臓喘息」の発作に見舞われる。戸棚の中にある薬を必死に求める「祖母」に対して薬の場所を知っている冽は、「腹ばいになった祖母の背中に乗り、まるで、メリー・ゴーラウンドのようにぴょんぴょんとびはねる」のだ。冽が

「祖母」を見殺しにするだけでなく、追い打ちを掛けたのは、自分に危害を加える彼女を恣にする機会を得たからである。そのことで、冽は自分の気持ちも鎮めるのである。こと切れた「祖母」を確認して冽は「また公園に」遊びに行く。

公園で「同年輩」と角力を取って負けた冽は、いつもならば「ベソをかく」のに「ニヤニヤと笑」う。それは、帰宅すれば「祖母」の葬斂が始まるという冽の確信からくる笑みである。

久恵の葬斂で冽を賞讃する大人の様々な行為は、「祖母」を殺させ、彼を「悪魔」へと変容させたのである。

### 五 「ママ」の殺害

#### (一)「ママ」を求める冽

作品冒頭で冽は「ママ」に「赤黄青のチョークで」彩った靴を見せようとして「祖母」に在宅を確認する。冽が誰でもなく「ママ」に見せようとしたのは、彼女の賞讃が欲しかったからである。冽にとって「ママ」は母親としてだけではない特別な存在だったと考えられる。

以下は、久恵の亡骸がある部屋での「祖母」と「ママ」の遣り取りである。

「子供が病気の時に、家をあけるなんて」久恵の亡骸を置いた隣の部屋で、低い祖母の声がし、「そんなこといったって、今日は前から約束してあって、だからおばあちゃんにたのんでいったんじゃありませんか」「じゃ何かい、私がわるいとしても、私が久恵を殺したとでもおいしいかい」「そういうわけじゃありませんけど」祖母は涙まじりに何事かをいい、母も泣き声で、「あんまりですわ、そんな」

この本文での遣り取りは、「ママ」と「祖母」の立場を表している。「ママ」は約束があるから、事前に「祖母」に久恵を頼んでいた。しかし、「祖母」は「ママ」の外出を咎めるのだ。「ママと祖母の喧嘩」は、「二日にあげぬ」頻度で行われているが、「祖母」が上位にすることが本文から推察される。すなわち、「ママ」は例と同様に「祖母」に抑圧された存在なのである。「ママ」の「PTAだ三味線のおさらいだと、外出が多」いのは、彼女の気質のみではなく「祖母」の抑圧から逃れる為でもあったと考えられる。

更に、久恵が生まれて「パパも祖母も、まず久恵」だったが、「ママ」は「母乳をいやが」った。そのことで例も「あ

からさまにママをとられた印象」を持たないのである。

「ママ」は、例にとって「祖母」をめぐる立場を共有した同志であり、唯一久恵に収奪されなかった存在だったことが窺われる。

そして、そんな「ママ」の承認を例は、希求していたのではないだろうか。

## (二)「ママ」の裏切りと例の殺害行為

「例の期待は裏切られることな」く「祖母」の葬斂が始まった。「ママ」の妹は、「みてごらんなさい。かわいそうに例ちゃん、姉さん、よほどやさしくしてあげないと、こうたてつづけに肉親に死なれちゃ、将来よくない」と提案する。「ママ」が「当分、お稽古もやめて、そばにいてやらなきゃ」という妹の提案への了承は、例にとって僥倖だった。「祖母」の葬斂で「ただうつむいてすわっていれば、数えきれぬほどの温かい手やごつい手で頭をなで」てもらい、希求していた「ママ」をも例は、手に入れたのである。しかし、例の期待はすぐに裏切られることになる。

「祖母」の葬斂を「やがて師走、どちらさまもかき入れ時に申し訳ない」という理由で「ママ」は初七日だけで打ち切る。これは、「ママ」の「祖母」に対する復讐である

と考えられる。いずれにしても、冽にとつては「待ちに待った」葬斂を奪われてしまったことになる。

更に、「もともと外出好き派手好きのママ」は「二人っきりで家に閉じこもっている」と、すぐにヒステリー起して「冽に辛辣な言葉を浴びせる。そして、「宵のうち二階のママの部屋で」「そい伏ししても、夜中に必ずママは襖一つへだてたパパの寝室にうつ」るのである。冽が希求した「ママ」であつたが、彼女は彼一人のものではなかつた。

以上の度重なる「ママ」の行為を冽は裏切りと捉えたのではないだろうか。「三月におさらいがある」ということで一人、留守番をしていた冽が仏壇の中の久恵と祖母の写真を眺め、「結局、自分の友達はこの二人のように思えてくる」のは、その証左である。冽が二人の写真の前で賽の河原の文句を唄い、「うろ覚えの経」を唱えていることを咎めた「ママ」の行為は、彼への裏切りを決定的なものにした。

冽が水を飲む為に台所へ行ったものの、「きれい好きな祖母」とは違い、汚れたコップを「ママ」は放置している。蛇口に直接口をつけて水を飲んだ冽は、寝巻きを濡らしてしまう。冽はこのとき、持ち前の臆病で「しかられる怖さが先に立」ってガストープを点ける。濡れた胸元を乾かし、冽は自動点火の栓をひねらずにガスを漏出させて二階

へあがる。ガスによって自分を裏切った「ママ」の殺害を冽は、実行して彼女の葬斂を夢想するのである。

冽の殺害行為は、「祖母」による嫉と「ママ」による怠惰と裏切りが結実させたものである。

## 六 おわりに

大月氏と西本氏が述べているように「子供は純朴なもの、無垢な心を持った存在である、というイデオロギー」批判を本作から読み取ることができる。父親や母親に「パパ」や「ママ」などの普通名詞を使用しているのは、作中に止まらない子供を無垢なものと捉える人間の普遍的な倫理観に異を唱えているからである。

冽は無垢ではないが、純粋な子供だった。純粋に自分の願望を冽は、満たそうとする。冽の願望とは、自分の思いのままになる環境を得ることである。久恵や祖母の葬斂は冽が思つた通りの環境を作り出した。それを得る為に冽は「ママ」をも殺害しようとし、「パパ」も殺害の射程に入れる。この冽の願望とそれを満たす為の行為を、大人たちは想像することさえしない。大人たちは自分の経験や先入観から脱することなく、〈冽という子供〉を捉える。しかし、大人が捉えたのは〈冽そのもの〉ではない。大人たちが捉

えた例と例本人がいかにか乖離しているかを作中に亘って〈語り手〉は示している。すなわち、本作は人間が自分の中で捉えた対象を〈対象そのもの〉ではない、という認識を持つことが重要であると訴えているのである。

(註)

(1) 野坂昭如『野坂昭如コレクション1』(二〇〇〇年九月国書刊行会)の解題による。

なお、野坂昭如には、未だ全集が刊行されていない為、本論での本文引用は、全て平成十二(二〇〇〇)年九月に国書刊行会より刊行された『野坂昭如コレクション1』による。

また、『野坂昭如コレクション1』の「子供は神の子」についての解題では、「一九六七年十月、講談社より刊行された『受胎旅行』に収録。」となっている。しかし、一九六七年十月に刊行された『受胎旅行』は、新潮社によって出版されたものである。

(2) (1)に同じ。

(3) 西本鶏介「悪魔になれる子ども―野坂昭如『子供は神の子』」(西本鶏介児童文学論コレクションⅢ 文学のなかで描かれる人間像 児童文学の歴史・民話論)二〇一二年八月 ポプラ社)

参考資料

高田佳、北村一紘、奥村真佑、三宅高文、三上敦大

「当院患者におけるZSの利用状況と症状への影響や病理に関する検討」

『市立室蘭総合病院医誌』42巻1号 二〇一七年九月 市立室蘭総合病院)

西本鶏介『西本鶏介児童文学論コレクションⅢ 文学のなかで描かれる人間像

児童文学の歴史・民話論』二〇一二年八月 ポプラ社

野坂昭如『野坂昭如コレクション1』(二〇〇〇年九月国書刊行会)

附記

久恵の葬斂は、完遂されている。しかし、「祖母」の葬斂は中途半端なもので終結されている。「祖母」の信仰している「生長の家」が編集した雑誌『白鳩』26号(一九五七年五月 日本教文社)に「子供は神の子」の記事があり、本作との関連が窺われる。また、「祖母」の葬斂の未完遂と「生長の家」との関連は、無視できないと思われるが、紙幅が尽きているので別稿を期したい。

(とくなが・あつし、創価大学大学院文学研究科人文学専攻博士後期課程)